

## 『ひょうご歴史研究室紀要』第四号の刊行にあたって

本誌『ひょうご歴史研究室紀要』第四号の巻頭言を書くにあたって、あらためて創刊号を見返してみました。そこでは平成二七年四月の研究室の発足が大きな話題となったことを伝えるとともに、「研究室が注目されているのは、①『播磨国風土記』、②赤松氏と山城、③たたら製鉄という三つの研究テーマが、いずれも播磨の歴史を広域的に物語る重要なテーマであることに一つの要因がある」と自己分析しており、「ひょうご」といいながら、播磨に特化していることをみずから認めています。幸いなことに、そのことに関して室へ目立った批判は寄せられていませんが、わたしたちとしてはやはり意識せざるを得ません。とくに今年度は、兵庫県政一五〇周年として記念事業が行われ、わたしどもの兵庫県立歴史博物館でも五期にわたる展示を開催したことから、ひょうご歴史研究室と摂津・播磨・但馬・丹波・淡路の旧五力国（摂津と丹波は一部）という問題を、あらためて考える機会が生じました。そのことを含め、現在の室の研究の状況と方向性を説明し、ご理解を得たいと思います。

第一に『播磨国風土記』研究班は、平成二八年に日本遺産に認定された「『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島」淡路く古代国家を支えた海人の営み」の事業にかかわり、淡路にも手を広げることになりました。淡路三市や淡路県民局、くにうみ協会、淡路青年会議所など島ぐるみの官民一体の組織は淡路島日本遺産委員会との協力が、その足場となっているのです。昨年二月には淡路市で、本年二月には南あわじ市で、研究室と淡路島日本遺産委員会主催で二度のシンポジウムが開催され、島内のみならず明石海峡大橋を渡って阪神間からも多数の参加者がありました。こうしてひょうご歴史研究室は、淡路に手が届くようになりました。さらに今年のシンポには島根県教育庁文化財課からも講師をお招きしています。研究室三年目の方針として「島根県古代文化センターとの連携を強化して、ひょうご地域史研究の発展をはかる」と明記されています。室全体の方針になっている理由は、たたら製鉄研究班でも、すでに島根県古代文化センターとの協力関係が進んでいるからです。

こうした視野の拡大を、四年間の成果の第一とするならば、第二には、班相互の交流が進んだことを上げることができません。具体的には、赤松氏と山城研究班とたたら製鉄研究班の乗り入れが、刀剣調査を通じて実現したのです。本誌所収の古市晃「仲野安雄の『淡路常磐草』と関連史料群」が、第一の動向を示すとするならば、第二の動向は、大村拓生「千種鉄の流通と刀剣」に読み取ることができません。この動向はさらに、刀剣の産地として知られている備前長船の属する岡山県との連携を、今後、模索させることになる予想されます。

第三の成果は、研究室の調査・研究活動を通じて、兵庫県内の史跡指定が進んだことがあげられます。「歴史遺産活用」のコーナーで紹介されている佐用町の利神城跡の国史跡指定には、赤松氏と山城研究班のメンバーが複数加わり、保存活用計画策定事業にも関与しています。ひょうご歴史研究室の「陰の力」と、言えるでしょう。その力は、上郡町の実施している赤松氏居館跡の発掘調査に遺憾なく発揮されましたが、近い将来、国史跡白旗城跡への追加指定として実を結ぶことも期待されます。

その意味で、ひょうご歴史研究室は、現場に役立つ組織として機能していることを示していると、ひそかに自負するものがあります。その現れを「歴史遺産活用」に見ることができます。このコーナーは本誌創刊号から続けられているものですが、これまで各号一本の論考が収められていましたが、本号ではなんと、三本の論考が寄稿されることになったのです。そこに共通するのは、地域に残るさまざまな遺産を「守り、学び、活かし、磨く」ことで、地域の誇りとしていこう、という取り組みです。その取り組みに参加する小学生や中・高校生などの姿は、ひょうご歴史研究室の目ざすものを教えてくれます。三つの班の活動の背景にある横断的なネットワークの存在に思いを及ぼしていただければ幸いです。

平成三十一年三月

兵庫県立歴史博物館長・ひょうご歴史研究室長

藪田 貫